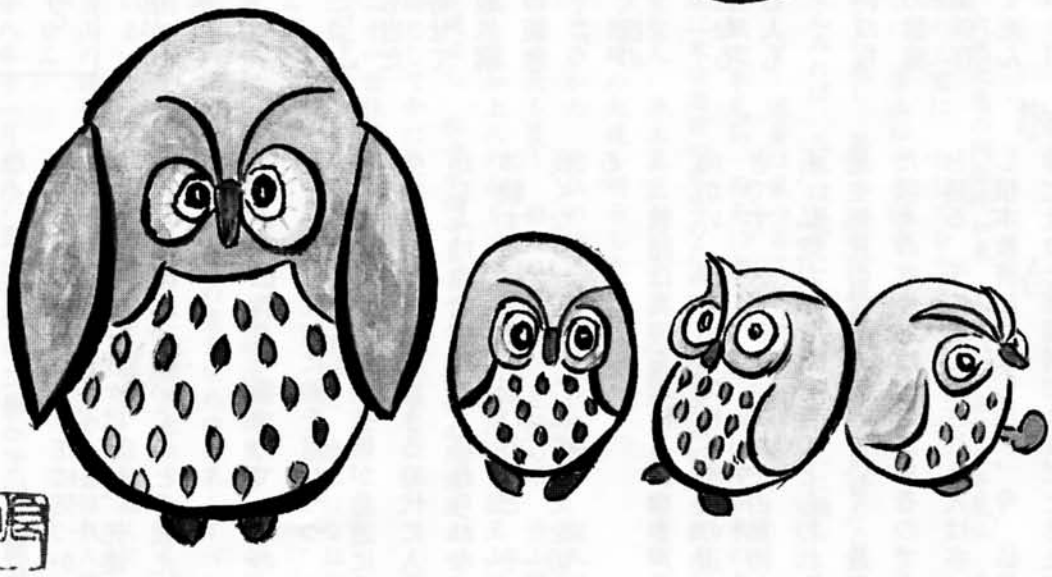
寺報　真宗大谷派松寺永福寺

松寺だより

平成19年10月1日発行
第31号
発行所
富山市梅沢町3丁目1―6
真宗大谷派　松寺永福寺
電　話（076）423―1848
発行人　長　真　寿

老いてなほ
親を思ふ心
子を思ふ
この心
良子



＜画と文＞富山市藤の木園町　本田良子さんの色紙「こころ」より

文化時報の記事より

『千の風になって』の大ヒットに思う

同朋大学大学院　田代俊孝教授に聞く

田代教授が「死そして生を考える研究会」を主宰して二十五年になろうとしている。「千の風になって」が流行する理由に、伝統教団の怠慢を指摘する。

「儀式だけに終始し身近な人を亡くした人のケアをしてきませんでした。死んだ人が風になって、残された人を見守る、いかにも日本人の感性に合う詩ですが、癒しにはなっても〝苦〟からの根本的な救済にはなりません。社会や自分に対する不安、死への恐れ、生きることの苦しみに本当に悩むことなく、スピリチュアルや占いなど、時代によって流行する不確かな、その程度のものに納得してしまう。癒しを求める若い人たちを見ていて、それも社会現象となっている現実に、教団の責任を感じます。仏教は本来、教化を通して社会（現象）に深く関わってきたのですから」と話す。

報恩講教団が崩壊しつつある現状。

「限界集落までは行かずとも、葬儀をすれば門徒が一軒減るという厳しい地方の話も聞きます。しかし、ほとんどの僧侶が、今後も葬儀は途切れないだろう、生活は安泰だろうと見くびってしまっています。そちらの方がより心配です。

かつて真宗文化は『門徒もの忌み知らず』で、日柄に関係なく友引の葬儀なども当たり前だったのが〝街の文化〟が押し寄せています。真宗の最重要仏事であった報恩講が急速に廃れているのも、祖先崇拝の観念が真宗を侵食しているということでしょう。一度廃れたものを回復させるには並大抵の努力では済まない」と見る。

人は死んだら風になるのか、先祖になるのか、死んだらおしまいと考えている人も増えている。

「いのちはモノではありません。いのちをモノと考えるから所有意識や死後の霊魂観が出てくるのです。縁起の中で、関係存在として生かされて、〝ご縁〟があって死んでいく。実体的に考えるから死を分かりづらくさせてしまう。

誕生も死も、無限のいのちの働きの中に含まれ、真宗では死者は先祖になるのではなく、無量寿の中に帰っていく諸仏になる。無限のいのちという存在に気づかせて頂く善知識として、我々は諸仏、先達に、阿弥陀さんに出遇っていくことを教えて頂くのです」。

いま、仏教を一番求めているのは医学界だという。如何に齢を重ねつつ、幸福を維持していくか、延命技術が急速に進歩し、生命維持は機械でできる時代に入った。しかし人は生老病死に、逃れられない迷いを体験する。寿命が延びるほど、その期間は長くなり、苦悩への真の答えを切実に求める。

「教団は真理を求める声なき声に真剣に向かい、声を出して根本救済の道を示すべきです。スピリチュアルや占星術などよりも、仏陀が示した有無のとらわれを離れた無生無死の世界を説いていく、最初に言った我々の怠慢とはそこにあるのです」と語る。千の風で癒された人は多い。しかし根本救済にはならない。今、仏教者は高齢化社会を葬儀増加社会だと考えて安逸の道を取るのか、それとも…

ご案内

十一月四・五日（日・月）

四日　午前十時（午後なし）
五日　午前十時（午後なし）

報恩講 謹修

法話
（四日）専徳寺住職　森島憲秀師
（五日）当寺住職　他

今年も聖人のご恩を偲び、ご恩の中に育っている私を明らかにさせて頂きましょう。どなた様もお誘い合わせの上、ご参詣下さいますよう、お待ち申し上げます。

平成十九年　十月

敬白

敬って　大慈大悲の阿弥陀如来　人界の教主釈迦牟尼仏　並びに十方三世の三宝に　白してもうさく

本日ここに　当山松寺永福寺　門信徒あいつどいて　うやうやしく尊前を荘厳し　第二十一世住職継職奉告式を勤修したてまつる

それおもんみれば　三界は無常にして六道は苦しみに満ち　人間は煩悩繁くして　迷妄は果つることなし

しかれば釈迦牟尼仏　西天に出でまして　阿弥陀如来の本願を説き　殊に末法濁世の衆生のために　念仏成仏の道を教えたまい

宗祖親鸞聖人　浄土真宗を開きて　『顕浄土真実教行証文類』の中に　無碍の大道を明示したまう

それよりこのかた　念仏の法流は遠く末代を潤し　聖人の勧化はあまねく四天を覆う　顧みれば　文明年間の頃　当山開基玄永蓮真　蓮如上人の命をうけ　福光町才川七　医王山に念仏の道場を建立し　松寺永福寺と名づく　篤信の門信徒あいつどい法灯連綿として今にいたり　遠き宿縁の催しによって　釈真寿当山第二十一世住職に就任す

しかれども　自ら省みて　学浅く　徳薄し　故にはなはだその器にあらず

しかれば　仏祖の冥助もとより　有縁法中の良導　ならびに門信徒一同の協力なくんば　この重責ゆめゆめ果たすべからず

自ら渾身の努力をいたさずんば　この職務全うすべからず

今や　いよいよ　末法濁世の時　よく学び　よく励んで　我が身命を当山の護持発展に捧げ　もって必ずや　自信教人信の大業を全うせん

平成十八年十一月五日

医王山　松寺永福寺住職　釈真寿　敬って白うす

平成13年お盆特別法話抄出

南砺市城端大福寺住職　太田浩史師

なぜ松寺というのか(6)

◆松寺の名称の由来

さてこのようにして、蓮真の開かれた教線によって、これまで時宗だった人達とか、山伏だった人達がみなこの真宗に変わっていったという動きがあるわけです。

そこでこの松寺という名称ですが、蓮真が亡くなって次の代くらいの時に、天文年間に永福寺に寄進をしている資料に、仏土寺という寺の名が出てきます。これは時宗の寺ですが、福光にありました。いまは寺はありません。地名として残っています。みんな永福寺になっています。そしてここに集まるのは時宗の芸能集団なのです。松寺瞽女(ごぜ)という人達ですが、「松」というのは芸能人がお客さんを待つという意味があって、それでいつしか松寺という名が定着していったと考えられます。

そこへ行くと芝居やらみんなで歌をうたったり踊ったり、自由に商売もできる楽しい場所だったのでしょうね。しかもその根本に真宗のご信心が語られる。蓮如上人も法話をなさるときに、みんなが退屈するものですから、途中に芸能を入れたりなさっていたようです。中世の虐げられていた芸能集団と本願寺が結びついて、お互いに生かされて行くという、こうして松寺というものの大勢が確立いたします。

◆石山合戦

越前の朝倉を滅ぼした織田信長はさらに本願寺を攻めます。この石山合戦に大活躍したのが、善徳寺空勝と永福寺の了誓ですが、戦い利あらずして8年後に石山本願寺が陥落します。その後、織田信長の軍勢が10万の大軍を率いて加賀の国に入ってきて、加賀の一向宗は皆殺しにあうのです。いまも鳥越村にその遺跡が保存されています。天承9年になると10万の軍勢が越中平野になだれ込んできます。武将は柴田勝家、副将は前田利家と佐々成正と佐久間信守など、錚々たる武将たちが本願寺の生き残りの壊滅作戦を展開したのです。越中平野の寺々は全部焼き尽くされます。それで善徳寺や永福寺は五箇山に逃げた。いま五箇山の人口は1700ほどですが、当時は1万を突破したといわれます。みんな難民です。真宗門徒の最後の生き残りです。五箇山で最後の抵抗を試みた。丁度そんなときに雪が降ってきて、織田信長の先鋒の佐々成正はとうとう攻めきることができず、越年しますが、年が明けていよいよ攻めようというときに、上杉景勝が出てきてくれまして魚津城で80日間の攻防戦をやってくれたので、なんとか助かった。きわどいところだったのです。そのときに、善徳寺の空勝と松寺永福寺の了誓は、なにをやっていたのかということです。

あとがき

◆昨年の十一月十六日を初回として、「医療よろず相談室」を開催いたしました。相談室長は富山県立中央病院名誉院長・前済生会富山病院院長である辻政彦先生です。早いもので九月まで十五回を重ねました。先生の熱意あふれる、そして時折の宝石のように輝くお話しが好評で、平均二十名前後、多いときは三十名のご出席があります。その都度レジュメをテーマに沿って作成され、参加者に配布していただいています。今までのテーマは、ご参考までに。

◆「健康で長生きするために」
「検査でなにがわかるの」
「食生活の健康学」
「運動の健康学」
「体質と病気」
「睡眠の健康学」
「癌をよく知ろう」
「癌を発生させない」
「病気になっても落ち込まない」
「健康と薬」
「上手な医者のかかりかた」
「心に残る患者さん」
「医療の中の不確実性」
「医療の将来」
「これからの医療」

◆個人相談もして頂けます。先生の崇高な奉仕精神から相談料は要りません。どなたもどうぞご参加下さい。

◆総代の田中良二氏、役員の白崎勉氏が相次いでお盆に亡くなりました。お二人はいつも記帳場で受付をして下さいました。残念です。(前住記)